インタビュー

問題解決的な「探究学習」がこれからの時代を生きる力を育む

関西大学総合情報学部教授　黒上晴夫

現在審議中の次期学習指導要領では、探究学習をより一層充実させることを打ち出す方向で議論が進んでいる。なぜ今、探究学習が求められているのか。そもそも、探究学習とはどういったものなのか。中央教育審議会の「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」の委員を務めている関西大学の黒上晴夫教授に聞いた。

探究のサイクルを繰り返し考えを深め、更新していく

「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）の中で、教科横断的・総合的な学習とともに、探究学習にも取り組まなくてはいけないことが、既に現行の学習指導要領の中に明記されています。そして、現在審議が行われている次期学習指導要領では、探究学習をより一層重視する方向で議論が進められています。特に高校においては、選択科目として「理数探究」や「日本史探究」「世界史探究」などを創設したり、総合学習を「総合的な探究の時間」に改めたりすることが検討されています。

総合学習における探究学習とは、生徒自身による問題解決的な学習活動が、発展的に繰り返されていくことを言います（**図1**）。探究学習では、生徒自身が課題の設定を行い、設定した課題に基づいて情報を収集し、整理・分析した上で、課題の解決案を自分の意見としてまとめ、論文やプレゼンテーションなどの形で表現します。表現したものについては、他者との議論の機会や、自身の振り返りの場を設けるようにします。すると、他者からの意見や質問、自身の振り返りを通して、考えの更新が行われ、さらに深い問題意識が生まれます。その問題意識を基にまた新たな課題を設定して、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現に取り組んでいく。そのようにして自らの考えや課題を更新し、深めながら、探究のサイクルをらせん状に繰り返していく学びが、探究学習なのです。

では、なぜ次期学習指導要領では、探究学習をこれまで以上に重視しようとしているのでしょうか。その背景には、私たちを取り巻く社会環境が大きく変化しつつあり、新しい時代を生きていく上で必要となる資質や能力も変わろうとしていることがあります。

２０１４年11月に下村博文文部科学大臣（当時）が出した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」では、教育課程の新たなあり方を構築することが必要となる社会的な背景について、次のように述べられています。

「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、子供たちが就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになるだろうと指摘されています。また、成熟社会を迎えた我が国が、個人と社会の豊かさを追求していくためには、一人一

人の多様性を原動力とし、新たな価値を生み出していくことが必要となります」

そこで述べられている社会状況の予測に対して、異を唱える人はあまりいないでしょう。例えば、職業については、今後AI（人工知能）が進化すると、定型的な業務は次第にAIに代替され、多くの人が知的創造性の高い仕事や、高次の判断が必要な仕事に就くことを求められるようになると言われています。

その時に必要とされるのは、知識の量だけではありません。様々な事象に対して何が問題であるのか、すなわち課題を設定し、課題解決に向けて様々な知識や情報を取り込みながら分析を行い、思考を巡らせ、課題の解決に導いていく、そういった力が必要不可欠となります。そして、まさにそうした力を身につけさせることをねらいとしているのが、探究学習なのです。

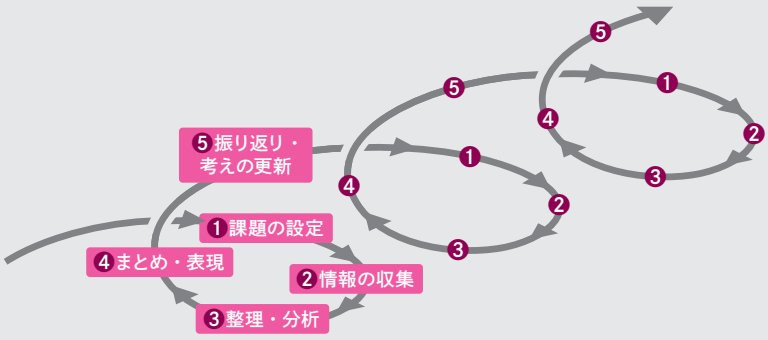
くろかみ・はるお◎大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学助手、金沢大学助教授を経て、現職。専門分野は教育工学。中央教育審議会教育課程部会「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ」の委員等を務める。主な著書に『こうすれば考える力がつく！　中学校思考ツール』『考えるってこういうことか！　「思考ツール」の授業』（ともに小学館）など。

探究学習は教科学力も伸ばしていく

先生方の中には、探究学習の重要性については理解しつつも、「探究学習ばかりに注力しすぎると、各教科で必要とされる知識・技能の習得がおろそかになるのではないか」といった疑問を抱いている方もいるかもしれません。しかし実際には、探究学習に力を注いでいる学校ほど、生徒の知識・技能の習得も進むというデータがあります。

文部科学省では毎年、小学校6年生と中学校3年生を対象に、「全国学力・学習状況調査」を実施しています。それによると、総合学習の中で、「自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの

図1　探究学習のプロセス



1 課題の設定	現状と目標とのギャップを捉え、課題意識を持つ、課題点を見いだす。
2 情報の収集	必要な情報を取り出したり、収集したりする。設定された課題に対し、解決プロセスを決定し、必要な情報は何かを考えたり、情報収集を行ったりする。
3 整理・分析	問題解決を見通して情報を処理する。多様な手法で収集した情報を構造化・可視化し、多様な視点から分析する。
4 まとめ・表現	結論・主張の伝え方を吟味し、他者に伝えたり、議論したりする。
5 振り返り・考えの更新	まとめ、表現したもの（成果）について、グループ・各自で何ができていて、何ができていないかを把握するとともに、その間のプロセスについても検証し、次に向けて新たな課題を生み出す。

＊「高等学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編」と「未来を拓く『探究』導入編」(ベネッセより刊行→ P. 9参照）を基に編集部で作成

学習活動に取り組んでいる」と答えた生徒ほど、各教科の正答率が高く、なおかつ知識を問うA問題、知識活用力を問うB問題ともに高いという結果が出ています（図2）。

高校では本調査は行われていないため、探究学習と各教科の知識および知識活用力との相関関係を測ることはできませんが、もし、同様の調査が実施された場合には、同じような結果が出ると予想されます。

生徒が、国際問題や地域社会、科学技術や生命・医療といった様々なテーマの中から自ら課題を設定し、課題解決に向けて探究学習に取り組む過程では、教科に関連する（あるいは教科を超えた）多くの知識が必要となります。しかも、その知識は課題意識と結びついているために、一度習得すると容易には剥落（はくらく）しません。丸暗記した知識は忘れやすいですが、生活に必要な知識や、興味・関心のある分野に関する知識は、忘れにくいのと同じです。

また、探究学習を通じて、自ら学ぶことの面白さを感じ取り、自己学習力が高まることも、教科ごとの知識や知識の活用力を押し上げる要因になると考えられます。

先生方の中には、「基本的な知識すら十分に身についていない生徒に、探究学習に取り組ませるのは難しい」と考える方もいるでしょう。しかし、むしろそれは逆です。課題設定が生徒の興味・関心に基づいたものであれば、生徒は学ぶことが、社会のあり方や、社会の中での自分の生き方を考える上で非常に大切であることに気づき、それが教科学習にも意識を向けるきっかけになります。

そもそも知識と探究学習との関係は、まず知識を習得して、次にその知識を基に探究学習を行うという順番ではありません。探究学習を行う中で、知識も身についていきます。そして知識が身につけば、さらに探究学習も深まっていくといった相互作用的な関係にあるのです。小学校でも総合学習が成り立っているように、探究学習を始める時点での知識量の多寡は問題になりません。

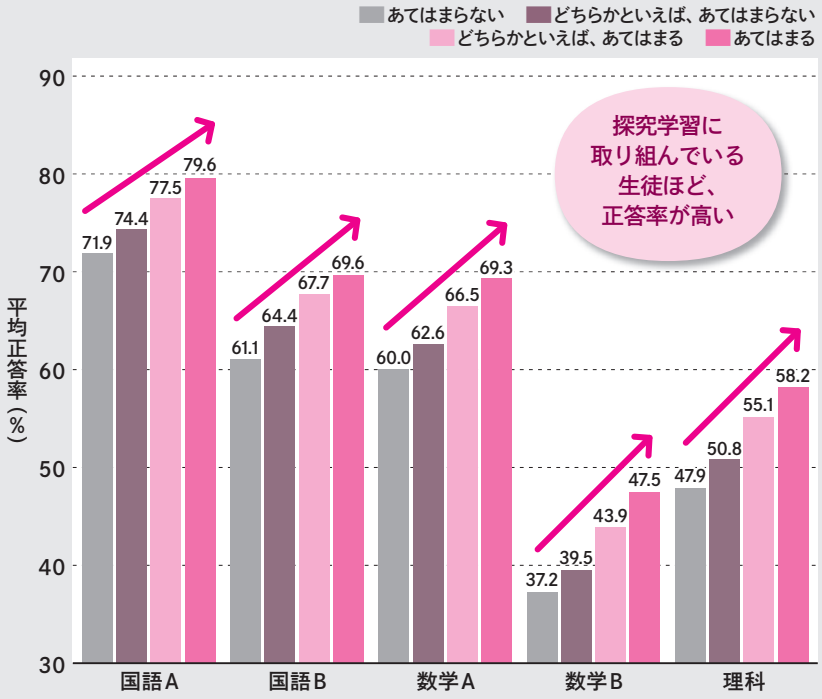
また、進学指導に多くの時間を取ることを重視し、総合学習が学習指導要領の本来の目標に沿った内容になっていない高校もあるようです。探究学習を推し進めることが、教科学力の向上にも結びつくことから考えると、その状況は大変もったいないと思います。

探究学習は、学びの資質、能力を高める

日本の中高生の学力の状況は、国際的な学力比較調査においては伸びが見られるものの、自己肯定感や学習意欲、社会参加の意識が低い、根拠や理由を示しながら自分の考えを述べるといった力が弱いといった指摘もあります。探究学習は、そうした学びに対する意識や、異なる価値観を受容する能力を高める上でも有効な教育活動だと考えられます。

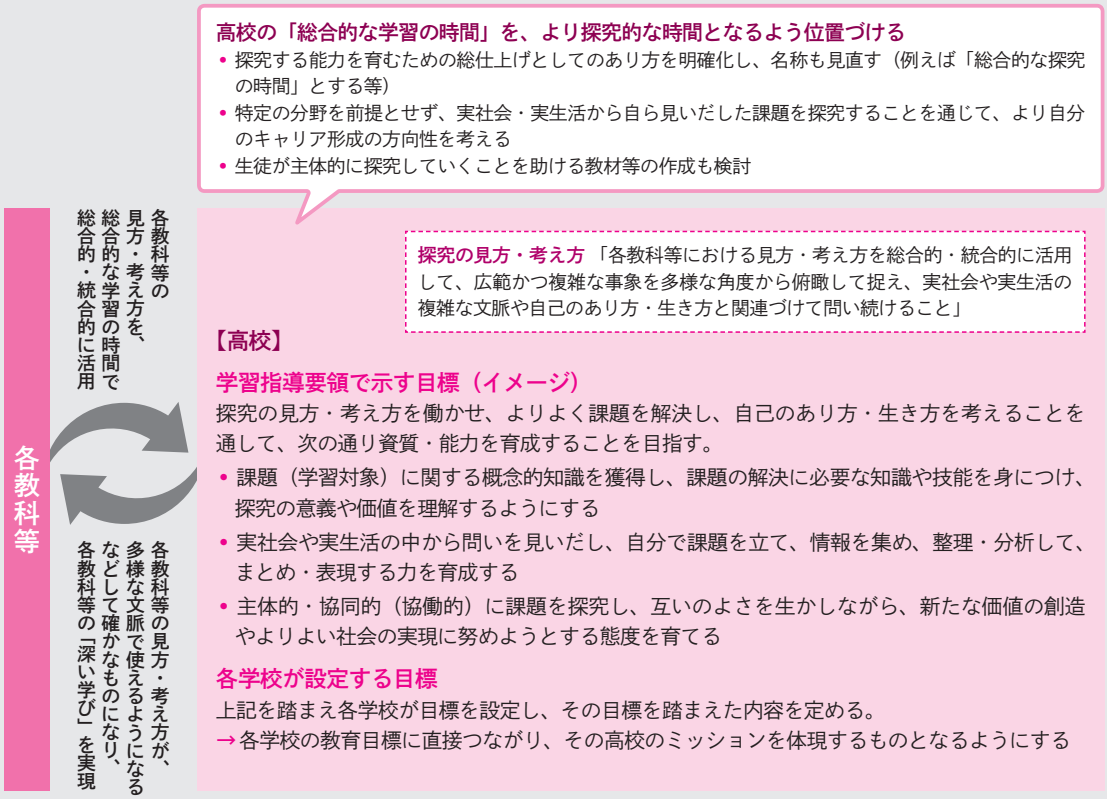
図2　「総合的な学習の時間」に取り組む姿勢と教科学力との関係（中学校）

Q.「総合的な学習の時間」では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。



出典／文部科学省「平成 27 年度　全国学力・学習状況調査」結果

図3 「総合的な学習の時間」における教育のイメージ



＊文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（第2部）」（2016年8月26日）を基に編集部で作成

周知のように、新しい時代を生きていく上で必要となる資質や能力が変化しつつある中で、大学入試も大きく変わろうとしています。「知識・技能」に加え、「思考力・判断力・表現力」を中心に見る「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が、センター試験に代わって、20年度から導入される予定です。また、各大学の個別選抜試験については、既に選抜方法や試験内容に変化が見られます。

私自身は、現行のセンター試験も、知識の詰め込みだけでは対応できず、思考力を働かせることが必要な良問が多いと感じています。とは言え、その思考の過程は見えず、導き出せる答えが1つしかない点にも課題があります。

新テストの実施にあたっては、様々なハードルがあるのは事実ですが、これからの時代に求められる資質や能力を考えると、大学入試改革の動きが逆戻りをすることはないでしょう。入試への対応という面でも、高校現場は探究学習により力を注ぐ必要が出てきています。

教科と総合学習を有機的に結びつける

フルバージョンの探究学習は、主に総合学習の中で行われます。探究学習では、①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現→⑤振り返り・考えの更新という、時間のかかる5つのプロセスをらせん状に繰り返していくことになりますから、教科の授業の中でそれを実践していくことは、物理的に困難です。教科の授業では、各教科の知識・技能の習得や、その活用力の向上を目指すべきです。

ただし、だからといって教科の授業で、探究的な学びが全く必要ないというわけではありません。様々な資料から情報を整理して自分の考えをまとめることは国語や英語でできるでしょうし、事象を科学的に分析して原因や解決策を考察することは数学や理科の授業で可能です。教科の授業においても、生徒自身が主体的に学び、かつ仲間との対話や協働を通じて、自らの考えを深め、知識

の構造化を図ることのできる授業にしていくことが求められます。つまり、「アクティブ・ラーニング」が不可欠となります。ちなみに、知識の構造化とは、元々持っていた知識に新たな知識が加わることで、物事に対する理解が深まったり、物事を見る時の思考の枠組み自体が更新されたりすることを言います。

また、知識の活用の場面では、習得した知識を実社会で起きている問題に関連づけて、生徒に考えさせたり、課題に取り組ませたりするといった工夫が大切になってきます。

そうして深い知識や見方・考え方が身につけば、総合学習の中で探究学習に取り組む時に生きてきます。また、逆に探究学習に取り組む中で、各教科の知識や見方・考え方を活用することによって、教科の学びが一層深まります（P.7図3）。各教科と総合学習を、そうした関係にしていく必要があります。

生徒の学びを深めるには教師のかかわりが重要

総合学習の中で探究学習を行っていくためには、探究の各プロセスを、ただ形式的にたどればよいわけではありません。極端に言えば、適当にテーマを設定し、インターネットで検索して出てきた情報をレポート用紙に貼りつけて提出しても、それらしきものはでき上がるでしょう。しかし、それでは探究学習とは言えません。各プロセスの生徒の学びがより深いものになるように、教師がしっかりとかかわる必要があります。

例えば、「課題の設定」では、その課題に対する自分なりの考えを持つことができ、なおかつその考えを深め、更新していけるものを、教師が生徒の興味・関心に働きかけながら、生徒自身に見つけさせることが鍵となります。この時に、例えば「街づくり」をテーマにした場合、「○○市の街づくりについて」といった課題設定では、市の施策や住民の取り組みの状況を調べる、といった調べ学習の範囲にとどまってしまう可能性があります。「人口の流出はどのようにしたら止められるか」「観光客に来てもらえる街にするためにはどうすればよいか」といったように、「情報の収集」や「整理・分析」を行う過程の中で、生徒が自分の意見を確立することが必要となるような課題を設定することが大切です。

また、「整理・分析」の時には、集めてきた情報を単にきれいに並べればよいわけではありません。情報を多面的に見たり、抽象化や構造化をしてみたりといった作業を生徒に行わせるような、深い分析が求められます。

そうしたことが求められるのは、総合学習のみならず、創設が検討されている「理数探究」などの探究的科目も同じです。ただし、「理数探究」では、理科や数学に関する、より高度な理解につながっていく課題を設定しなくてはいけないため、課題の設定に教師がより強くかかわる必要があるかもしれません。

探究学習に対する推進体制を整える

探究学習を深い学びにしていくためには、当然、教師の力量が問われます。探究学習の経験が少ない教師は、戸惑うことも多いでしょう。そうしたことを踏まえると、個々の教師の努力に委ねるだけではなく、学校全体としての推進体制を構築していくことが求められます。学校では、学習指導要領の改訂や大学入試改革の動きなども踏まえ、探究学習の充実がこれまで以上に求められることを説明した上で、研修などを通じて具体的な実践方法を伝え、導入のハードルを下げることが大切です。

指導ノウハウの共有のためには、教師同士で互いに授業を見合う授業研究も有効でしょう。ただし、探究学習では、教師が教壇に立って授業をすることは少なくなります。一方、生徒の活動は少人数や個人単位になる場面が多く、そのため、ただ授業を見ているだけでは、つかみどころ

がないままに終わってしまうことになりかねません。病院で医師や看護師が行うカンファレンスのように、個々の生徒の学習活動の状況や、その時々の学習のねらいをあらかじめ共有した上で臨むと、中身の濃い授業研究になります。

また、高校での探究学習は、生徒が個人単位で課題を探究するケースが多くなると考えられます。しかし、課題に沿った情報収集の方法や、整理・分析の仕方を、教師が一人ひとりの生徒に細かく指導していくのは大変な負荷となります。できれば生徒同士が学び合いながら、そうしたスキルを身につけていけるような仕組みを整えたいものです。例えば、ある高校では、先輩たちが総合学習で書いたレポートが図書室に保管されており、生徒はそれを読めば、情報収集の仕方や分析のコツが学べるようになっています。そのようにして学校は、探究学習が少しでもスムーズに進むように、体制を整える必要があります。

現在高校で行われている総合学習のテーマを見ると、「キャリア教育」が圧倒的に多いようです（**図4**）。私は、キャリア教育が「社会で今起きている問題を知り、その中で自分はいかに生きていくべきか。社会問題を解決するために、自分はどんな役割を果たせるか」といったことを生徒に深く考えさせることを目的としたものであれば、非常に意味があると思います。しかし、総合学習の中で行われているキャリア教育が、実質的には進学指導になっているなど、探究学習にまで深まっていないケースが少なくありません。キャリア教育を行うのであれば、生徒の目を大きく社会に開かせるようなものにしてほしいと思います。

繰り返しますが、社会は大きく変化しており、大学入試も変わりつつあります。これからの時代に、生徒が自己の能力を発揮しながら充実した人生を送れるようにするためには、今、どのような教育が必要なのかを教師が意識しながら、探究学習に取り組んでいく必要があるのだと思います。

図4　「総合的な学習の時間」の実施状況（高校）

■学年別の実施内容（2015年度入学者）　　複数回答（%）

学年		学習内容	国際理解	情報	環境	福祉・健康	伝統と文化	防災	まちづくり	キャリア	社会と政治	その他
全日制	普通科	1年	25.4	19.0	23.9	27.6	27.1	16.2	9.4	80.5	12.1	23.3
		2年	29.2	19.2	23.0	24.5	35.2	14.9	7.9	84.1	15.4	21.5
		3年	23.2	18.9	20.2	23.7	22.2	13.6	6.4	84.2	20.1	17.6
		※実施学科数	39.7	27.1	33.3	36.6	45.5	19.1	12.9	90.8	26.2	34.2
	専門学科	1年	22.2	16.6	19.5	23.3	24.5	13.6	7.2	70.2	8.7	23.4
		2年	24.4	16.4	19.1	22.8	27.9	11.8	6.9	72.2	10.0	23.4
		3年	16.8	15.5	17.6	19.6	20.0	11.5	8.6	62.6	11.7	22.9
		※実施学科数	27.4	21.0	25.7	25.8	32.3	14.2	11.1	72.7	16.2	31.4
	総合学科	1年	9.1	8.6	10.2	15.2	11.7	7.1	4.6	32.0	4.1	11.7
		2年	28.1	20.8	25.3	25.7	38.2	13.9	13.2	88.9	18.8	24.0
		3年	34.9	35.6	35.6	40.1	37.3	15.4	18.5	77.1	27.1	34.6
		※実施学科数	42.4	38.7	41.4	46.1	51.5	19.9	21.5	91.6	31.6	64.6

出典／文部科学省「平成27年度公立高等学校における教育課程の編成・実施状況調査の結果について」

「探究学習」導入のヒント満載の情報誌
『未来を拓く「探究」導入編』（無料）をご用意しました！

探究学習を「総合的な学習の時間」だけでなく、教科の授業や部活動など、学校の教育活動全体で取り入れていくためにはどうすればよいか、さらには、課題設定をどのようにすればよいかなど、実践のヒントと具体的な指導事例（「質問・疑問マトリクス」ワークシートの実例など）をまとめた教師向け無料情報誌です。ご興味のある先生は、以下までお問い合わせください。

◎問い合わせ先　お客様サービスセンター：
フリーダイヤル 0120-350455
◎受付時間　月～金 8:00～19:00／
土 8:00～17:00（祝日・年末年始除く）

黒上教授監修！